

# 女子大國文

第百五十六号

平成二十七年一月発行

女子大國文 第百五十六号

平成二十七年一月発行

京都女子大学国文学会

女子大國文

第百五十六号

平成二十七年一月十五日 印刷  
平成二十七年一月三十一日 発行

〒605-8585 京都市東山区今熊野北日吉町五番地  
編輯兼 発行者 京都女子大学国文学会

電話 〇七五-五三一九〇七六  
FAX 〇七五-五三一九二一〇  
振替 〇〇〇〇-五三三一四

〒603-8484 京都市上京区上長者町通黒門東入  
印刷所 西村印刷株式会社

電話 〇七五-四四一四一〇八代  
FAX 〇七五-四三三六二八二

『出世景清』第二段「清水寺轟坊の場」注釈再考：正木ゆみ（一）  
——双六用語の秀句における近松の工夫——

高野山大学附属図書館 蔵本 三教指歸譯文稿……………西崎 亨（二八）  
（金剛三昧院寄託）

〔資料紹介〕  
近衛前久（龍山）詠『五十首和歌』  
関連資料 解題と翻刻（上）……………大谷俊太（八二）

彙報……………（二六）

京都女子大学国文学会

# 彙報

奈良を巡って…

一回生 津熊 薫

○春季学芸旅行参加者の感想文、秋季公開講座出席者の感想文、秋季学芸旅行参加者の感想文などを掲載してあります。

## 二〇一四年度国文学会行事（後期）

○秋季公開講座（大学と共催）

十月二十日（月）午後二時四十五分より於J420教室

講題 本文の崩れゆく過程―『紹巴富士見道記』―

講師 大阪大学名誉教授 島津忠夫先生

講義に出席した学生さんのうち、一名の学生さんに、先生の  
ご講義をうかがった感想を寄せていただきました。

○国文学会後期学芸旅行

十一月十六日（日）に、後期の国文学会旅行を実施しました。

今回は、学会委員の学生さんたちによる自主企画で、学科主任の先生と、運営委員の先生方と、八名の学生さんが参加し、鞍馬寺や由岐神社など、京都の鞍馬方面散策を楽しみました。今回の旅行に参加した学生さん二名から、旅行記を寄せていただきました。

六月二十九日、私は国文学会の旅行で奈良へ行きました。一緒に旅行へ行った友人は雨女らしく、旅行に行く随分前から、当日は雨になると言っていました。ですが、当日はとても良いお天気に恵まれ、旅行日和になりました。奈良で、文学や歴史にまつわる色々な場所を巡り、多くの貴重なものを見て、印象に残ったことについての感想を述べていきたいと思っています。

まずは、春日大社神苑萬葉植物園についてです。萬葉植物園には、万葉集に詠まれた植物がたくさん植栽されています。植物園に入り、最初に見たものは「紫草」という植物で、萬葉名では「むらさき」と呼ばれています。これは、万葉集に詠まれた植物の中でも特に代表格とされ、古来、最高貴な方々の位を表す衣装の色「紫色」は、この植物の根で染められていたそうです。現在では、国内に実生種は千株も無いとされる絶滅危惧植物です。小さな白い花でした。ちなみに、私たちが訪れたときには、あじさいが時期だったらしく、とても綺麗に咲いていました。春日大社の社紋である藤の花も見たかったのですが、時期ではなかったようで、開花している藤は見るできませんでした。見たい植物があれば、開花の時期を調べてから訪れるほうが、より一層楽しむこ

とができると思います。また、この萬葉植物園には、植物以外にもたくさん魅力があります。その一つとして、万葉集に詠まれる、その植物の代表的な万葉歌が、それぞれに添えられていることです。歌も植物も、どちらも楽しむことができます。ほかにも、萬葉植物園の中央には池があるので、その池中央の御神域(中ノ島)には、奈良指定文化財の「臥竜のイチイガシ」と呼ばれる老巨樹が立っています。この場所は、ほかの場所とは違った空気が流れているような、神聖で荘厳な雰囲気か漂っていました。また、園内の北東に位置する歌泉堂には、学問、特に火災除けの神様として、柿本人麻呂が祀られています。島崎藤村や会津八一といった、有名な歌人の碑などもあります。ですので、万葉集が好きな方や、文学に携わっている方におすすめの場所だと思います。萬葉植物園を出た私たちは、春日大社の宝物殿へ向かいました。中でも印象に残ったものは、新旧の「だ太鼓」です。入り口から見て手前に複製された新しい太鼓、奥に古い太鼓が展示されていました。複製の太鼓は、色がとても鮮やかで、装飾品なども美しく、豪華絢爛といった印象を受けました。古い太鼓は、色の落ち具合や残っている跡などから、長い歴史を感じることができました。また、当時の装束の複製も展示されていました。何枚も布を重ねているため、とても重たいようです。それを、当時の高貴な方々

は日常生活で着ていたのだと思うと……、現在からは想像もつきません。ほかにも、藤原頼通が寄進したと伝えられる「瑠璃灯笼」を見ました。この灯笼は瑠璃色のビーズが美しく、中に火が燈るとより一層美しいものになるのだと思います。当時に、色の付いたビーズを作る技術があつたことに驚きました。ここでも、たくさん貴重な展示品を見ることができ、昔の人やその生活に思いを馳せることができました。

その後、春日大社と手向山八幡宮への参拝に向かいました。春日大社では、おみくじを引いたのですが、私も友人も凶でした。軽いショックを受けたまま、手向山八幡宮への参拝に向かいました。手向山八幡宮には「菅公腰掛石」という石があります。この石は、菅原道真が、「このたびは 幣も取りあへず 手向山 紅葉の錦 神のまにまに」という歌を詠んだ際に、腰を掛けたところだとされています。傍らにはその歌が添えられています。そして、ここで御朱印帳を買われた先輩がいらっしゃいました。私もいつか、御朱印集めに挑戦してみたいです。

次に私たちは東大寺へ向かいました。大仏殿に入り、盧舎那仏坐像を見ました。本当に大きくて、その大きさには圧倒されました。その大仏様の前で、この日二回目となる参拝をして、大仏殿の中をめぐるしました。ここで、私は初めて御朱印が書かれる場

面に遭遇しました。何が書かれているのかは、文字が繋がりがずぎ  
ていて理解することはできなかったのですが、初めて目にした光  
景に見入ってしまいました。最後に南大門で、国宝である「金剛  
力士立像 阿形」と「金剛力士立像 吽形」を見て、今回の旅行  
は終了となりました。

この日は、文学に所縁のある多くの場所をめぐることができま  
した。たくさんの方の貴重な体験ができ、国文学科の学生としてこの  
旅行に参加してよかったです。

### 春の学会旅行に参加して

三回生 立部 早智子

私が今回の学会旅行に参加することに決めた理由は、行き先が  
奈良であったということと、行程の中に春日大社が含まれていた  
ということである。私は昔から奈良が好きであるが、高三の時に  
訪れて以来、一度も行っていないかった。だから、この学会旅行の  
日をとっても楽しみにしていた。ここでは、特に印象深かった猿沢  
池と春日大社について記述する。

まず初めは、昼食後に訪れた猿沢池である。猿沢池には、時の  
帝の寵愛が衰えたのを嘆いた采女が、この池に身を投げたとい  
う伝説があり、近くにはこの采女を祀る采女神社がある。この池は

采女の思いとは裏腹の、穏やかな水面をしていたので、采女がこ  
の池に入水したと思うと、私は何とも感慨深い気持ちになった。  
また、帝の気持ちの変化一つで、命まで左右されてしまった采女  
の人生とは、なんて儂いものであったのかと思った。

二つ目は、次に訪れた春日大社である。春日大社には萬葉植物  
園という神苑があり、そこには『万葉集』にも詠まれた、希少植  
物の「ムラサキ」という本場に小さな草花が咲いていた。花の名  
前は「ムラサキ」であるが、花自体は白い花である。古来からこ  
の草花の根は紫色の染料として用いられていたため、そこから「ム  
ラサキ」という名前が付いたのだと思う。『万葉集』の時代には  
すでに存在した花が、今も残っていると思うと、小さい花とはい  
え生命力の強さを感じた。

また、春日大社には宝物殿があり、王朝ゆかりの装束や美術工  
芸品などが収められている。その中でも、雅楽で用いられるとい  
う「大太鼓」が印象に残っている。あまりにも大きくて立派な太  
鼓であったため、最初に見たとき私は圧倒されてしまった。さら  
に、「大太鼓」に施された火焰の彫刻の鮮やかな色遣いによって、  
太鼓の重々しさが一層際立たされている印象を受けた。

そして、春日大社の本殿は八世紀に創建され、藤原氏の氏神が  
祀られている場所である。私はこの場所に立った時、少し背筋が

ピンと伸びたような気がした。なぜなら、境内には何頭もの鹿がおり、数多くの大木が立っていることもあって、春日大社の歴史の長さを感じさせる、厳かな空気に包まれた空間であつたからである。おそらく、このような空間が何千年もの間保たれているのも、人間がこの自然を大切に守り続けてきたからだと思う。

今回、久しぶりに奈良を訪れてみて、京都とは違った空気を感ずることができた。ここでは挙げられなかった、手向山八幡宮や東大寺においても周囲に自然が広がり、なおかつ人間と鹿が上手く共存している場所であつた。私にとってこの学会旅行は、自然と鹿と人間の関わりと、奈良の歴史の深さを再確認する良い機会となつた。

### 公開講座を受講して

三回生 本郷 由香理

今回の島津忠夫先生による講演「本文の崩れゆく過程―『紹巴富士見道記』―」では、『紹巴富士見道記』の様々な写本を比較して、本文の崩れゆく過程を学んだ。私は今まで写本の間違いというものをあまり意識していなかった。写本に様々な系統があり、それぞれ異なっている部分があるということもあまりよくわかっていなかった。そのため講座の内容は大変興味深く、面白いと感じた。

写本を比較してみると、ひとつの本文を読んでいるだけではわからない事実気付くことができる。例えば、甲子庵本の独自本文では記述されているものが、他では記述されていないことがある。「海蔵門にむかへり海蔵額弘法大師御筆昔は社辺に潮堰たるを海近く」（尾張〈帰路〉27）という記述は、京女本では「海蔵額弘法大師御筆昔は社辺に潮堰たるを」という部分が脱落してしまっている。そして、黒川本以下がそれを踏襲している。つまり、京女本以下を見てもこの部分を読むことはできない。一部落ちた本文を見ても正しい本文はわからないし、正しい解釈もできない。しかも、本文が落ちてしまっていることは気付くにくいように思う。そうしたことに気付くためにも、写本を見比べたり、原本にあたったりする必要があるのだと思つた。

京女本から黒川本・多和本・滋岡本への流れでは、「杜若寺」という言葉が「杜若寺」となってしまう。京女本では「守」であつたが、黒川本・多和本では「守」とも「寺」とも読める形になり、滋岡本・類従本では明瞭に「寺」となつた。元々は人を指していた言葉が場所の名前になってしまっている。同じように元々は人を指していたはずが、人ではないものを指すようになってしまった例として、「黄老」という言葉がある。京女本では「黄老」で、人名であつた。それが黒川本・多和本・滋岡本では「老」を

「花」と誤写し、「黄花」となった。これを黒川本により、岸田氏は「菜の花」と説明した。このように流れの中で、言葉が変化してまったく違うものを表していることがある。本文を読んでいて、意味がわかりにくい言葉があったときには、誤写を疑ってみる必要もあるのだと思った。

誤写が起るののは、人の手によって写されていたことを考えると、当然だと思う。しかしそれ以外に、理解できないから勝手に意味が通るように変えてしまった、また読みにくいので変えてしまった、というものもある。つまり、無意識で間違えてしまった部分に加えて、意識的に変えられた部分もあるということである。そう考えると、写本と原本の異なる部分は相当数あるのではないかと思った。

よくない本文をもとにしても正しい解釈はできず、徒勞に終わる。これから、卒業論文を書くために研究をしなければならぬ。そしてそれを成功させるためには、その研究対象となる本文を正しく解釈する必要がある。今回本文の崩れゆく過程を学んだことで、写本をそのまま信じるのではなく、写本を見比べたり、可能なら原本にあたりたりするべきだとわかった。本来あるべき形の本文で研究して、正しい解釈を導き出したい。そのために今回学んだことを忘れず、これから生かしていきたいと思う。

## 鞍馬への学会旅行

三回生 井上 真理子

十一月十六日日曜日の学会旅行で、鞍馬への旅に行ってきました。十一月中旬ということで、予想通り人も多く、特に出町柳は人で溢れ返っており、これから行く鞍馬でゆっくり紅葉狩りが出来るのか少し不安でした。

人数がそろって、いざ鞍馬へ。叡山電鉄の改札を抜けて、ちょうど到着した電車に乗り込みました。紅葉の時期は、紅葉スポットで電車の速度を落として下さるらしく、途中でゆっくりの走行になりました。車内は隙間もなくギュウギュウで、窓の外も見るのが難しい状態。ですが、視界が狭いながらも見えた黄色、橙色、赤色に、鞍馬の紅葉を見に行くのが更に楽しみになっていました。

時折見える鮮やかな色を楽しんでいると、鞍馬駅に無事到着。駅を出ると、大きな天狗の頭が迎えてくれました。にぎやかな駅前や通りを抜け、鞍馬寺のある方へ向かいました。山門をくぐる、門の外とはまた違った雰囲気を持つ空間がそこにありました。行きは、ケーブルカーで多宝塔のある場所まで登り、そこからは歩きで鞍馬寺金堂を目指して、ゆっくり登って行きました。黄色

や橙色の紅葉も、真っ赤な紅葉も交じっていて、もう少しで山全体が赤く染まる、という途中の時期のようでした。紅葉と聞いて想像するような、鮮やかな紅色は少しいたのですが、かえって、自然の綺麗なグラデーションを見ることが出来、幸運だったと思います。

下る時は歩きで、登りでは見られなかった場所の紅葉も楽しむことが出来ました。途中にある由岐神社でお参りし、後は山門までひたすら歩きました。写真を撮りたくさん撮ろうと思いつつ行ったデジカメは、山門前で集合写真を撮る時にやっと出番が……紅葉は一枚しか撮らず、あとは目に焼き付けてきました。

山門を出たのは、お昼過ぎ。そこからは自由行動で、お昼ご飯を食べに行きました。歩いて、おながが空いていたので、ごはんが余計に美味しく感じられました。(もちろん、とても美味しかったです。)

帰りは、再びみんなで電車に乗り、無事出町柳に帰ってきました。

途中、旅には付き物のハブニングもあったのですが、「人が多から」と心配していた迷子も出ず、いい時間が過ごせたのではないかなと思います。浦田さんと一緒に計画をたて、当日になるまで不安だったのですが、私達も先生方や学生のみなさんと一緒

に楽しむことが出来ました。

坂本先生、峯村先生、普賢先生、そして、今回の旅に参加して下さった学生のみなさん、貴重な日曜日にお付き合ひ下さって、有難うございました。

### 紅葉の鞍馬く秋の学会旅行に参加して

三回生 浦田 亜由美

平成二十六年十一月十六日、学会旅行で、秋の鞍馬を散策に行きました。この日は、とてもさわやかな秋晴れでした。紅葉も始まり、観光シーズンということで、朝、出町柳駅で参加者の集合を待つ間、電車が来るたびに大勢の人が行き交いました。いざ叡山電車に乗ると、電車の中は超満員で、通勤・通学の電車に乗っているかのような感じでした。行きの電車は、きららという車両で、車窓が大きく、外の景色を楽しめる仕様になっていました。途中にある、「もみじのトンネル」を通るときには電車がゆつくりと走りました。濃く色づいているものもあれば、まだ青いもの、染まりかけのものもあり、コントラストがきれいでした。

鞍馬駅に到着。移動販売で来ていたパン屋、土産物屋のお菓子、それらを食べ歩いている人々を横目に見ながら、鞍馬山入口の仁王門へと向かいました。仁王門や、また、仁王門を入ってからの

階段を見上げた景色は良い感じでした。

鞍馬寺金堂に行く途中までは、ケーブルカーを利用しました。ちなみに、このケーブルカーは、唯一、寺が運営している電鉄で、また、来年のゴールデンウィーク明けから三月末まで全面改修をするので、運休するのだそうです。発車するときに揺れるとアナウンスされましたが、予想以上にガクツと揺れました。

ケーブルカーを降り、降りたすぐの多宝塔を少し見て、灯籠が立ち並ぶ、整備された山の道を進みました。山のマイナスイオンを感じました。そして、金堂までの最後の階段を見上げた景色、また、高いところから見下ろす景色は、どちらもきれいでした。手水舎と、その上にあつた濃い赤のみじの組み合わせも印象的でした。その近くにあつた法輪堂の中は、人が少なく、外とは少し違った雰囲気、静かでした。

金堂につくと、人が並んでいました。中央にある小さな三角形の中に入る（その上に立つ）とパワーをもらうことができるのだそうで、そのための順番待ちの列でした。三角形の上で、押んでいる人もいたり、両手を広げてパワーを受けるような格好をする人もいたり、さまざまでした。私たちは、ここで自由時間をとって、参拝したり、御朱印をもらう人はもらったり、景色を眺めたりしました。ほかの観光客には、お昼ご飯を食べている人もいました。

下山にはケーブルカーを使わず、結構急な坂道を下って行きました。途中にある由岐神社にも参拝しました。そして、仁王門に戻ってきて記念撮影。ここでお昼休憩となりました。思い思いの品（パン）を買ったりもしました。その後、また満員電車で揺られて無事出町柳駅に到着、解散となりました。

絶好の観光日和に、紅葉した鞍馬を散策することができました。ちよつとしたハブニングはあつたけれど、それも含めて、とても楽しい一日となりました。

## 『女子大國文』 投稿規定

### 一、(投稿資格)

- ① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。
- ② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

### 二、(刊行回数・時期・投稿の締め切り)

- ① 毎年二回、九月と一月に刊行する。
- ② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする(厳守)。

### 三、(投稿の枚数)

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚(注・表・図版などを含む)を目安とする。また、完全原稿であることを原則とする(多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可)。

### 四、(投稿に際して提出すべきもの)

- ① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部(審査用。二部ともコピーしたもので可)。

- ② ワープロ原稿の場合、プリントアウトしたものの二部(審査用)と、投稿原稿が収められている電子データ(ワープロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワープロソフト名を通知すること)。

### 五、(投稿に際しての注意事項)

- ① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括弧で記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、(本学教授(本学大学院博士後期課程)(本学文学部国文学科四回生)などと記す。

- ② 連絡先の住所を記した別紙を添えること(採否の知らせや校正送付等のため)。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用す

ることはしない。

#### 六、(投稿先)

投稿先は以下の通り。

〒六〇五―八五〇―一 京都市東山区今熊野北日吉町三五番地

京都女子大学国文学会

『女子大國文』編集事務局

#### 七、(投稿論文の採否)

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

#### 八、(校正)

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修正は、査読を経た関係上認められない。

#### 九、(本誌・抜き刷りの贈呈)

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、

採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編集事務局まで連絡すること。

#### 十、(掲載論文の著作権及び電子媒体による公開)

本誌に掲載された論文等については著作権の複製権・公衆送信権を京都女子大学国文学会及び京都女子大学に許諾するものとする。但し、著作権の移動はなく、著作は両者、或いはいずれか一方への許諾をいつでも取り消すことができる。

本誌に掲載された論文等の全文又は一部を電子化し、京都女子大学学術情報リポジトリサーバ或いはその他のコンピュータネットワーク上で公開することがある。

#### 十一、(規定の改正)

- ① 本規定の改正は、会員の議決を経なければならない。
- ② 規定の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

#### 附則

本投稿規定は平成十八年三月二十日より施行する。

本投稿規定は平成二十三年十月五日より一部改正施行する。

本投稿規定は平成二十四年十月二十四日より一部改正施行する。

## 編集後記

○今号の査読委員は次の方々です。

大谷俊太・普賢保之・山崎ゆみ

以上の各氏に査読を依頼し、編集委員会において査読の結果を報告、審議の結果、三点が掲載となりました。

今後とも、会員の皆様の投稿をお待ちしております。

(山崎・宮崎)